

B-8

肺癌由来継代培養細胞の生物学的性状
(第1報)

徳島大学第二外科

○森田純二, 小島 聖, 稲山三治, 越智友成,
井上権治

徳島大学細菌

木村 右, 吉田長之

徳島大学総研電顕班

檜山達男

近年, 人癌の組織培養技術は, 急速に進歩しその業績も著しい。われわれも数年来肺癌の組織培養を試み, 現在6種の株化に成功している。その内訳は, 腺癌2例, 未分化癌2例, 扁平上皮癌1例, 喉頭癌からの転移性肺癌1例である。

培養細胞で常に問題となるのは, その細胞の同定法, およびその癌本来の性状をどこまで保つかにあると思われる。nude mouse の出現以来, これへの移植による同定法がもつとも再現性があるといわれ, われわれも試みているが, 再現性については, 未だ結論に達していない。

また培養細胞の生物学的性状が生体内での悪性度, その他の性質とどの様な関連性をもっているかも未だ明らかにはなっていないと思われる。その様な点からこれら6種の培養細胞と, 対照としての人胎児肺(H E L)細胞を用い種々の実験を進めている。

H E 染色ならびにPapanicolaou染色では, 各株の細胞の異型度, 巨細胞の出現の差が認められた。また染色体の検索ではモードおよび分布度の差が認められ, 特に未分化癌の場合, 分布の巾が広がった。

また肺癌由来の培養細胞内にはRNA腫瘍virusまたはherpes virus 様粒子が電顕的に観察されたという報告もあり, われわれも電顕的観察を行なっているが, 現在までvirus様粒子はいずれの細胞株にも認められず, 形態学的にも大きな差は相互に認めていない。それと関連しRNA腫瘍virusおよびherpes simplex virus(H S V)でtransformした細胞は, H S Vに対する感受性が低下するとの報告もあり, H E Lをcontrolに各細胞のH S Vに対する感受性をPlaque法にて検討した。各細胞ともH E Lに比し1/10~1/100程度にその感受性が低下しており, また形成されたPlaqueのsizeもH E Lに比し1/2~1/3の大きさであった。これ等の意義について, また他のvirusに対する感受性等についても今後検討を加えたい。

B-9

肺癌切除5年生存例の検討—とくに, 臨床症状が再現した症例

長崎大 第1外科

○富田正雄, 柴田紘一郎, 窪田美佐雄, 本多静也,
白石満州男, 綾部公懿, 武富勝郎, 大曲武征,
内山貴堯, 辻 泰邦

教室における肺癌切除後の5年生存率は21.1%であるが, 治癒切除ないし準治癒切除例の5年生存率は23.6%である。そのうち, 5年経過後の消息があきらかな症例は11例である。

その11例のうち, 6例は現在生存中であり, 最長11年5カ月健在の症例が含まれる。

今回は5年生存した11例を中心に長期生存に関連する因子について検討するとともに, 5年後に臨床症状が再現した2症例について報告する。

5年生存例の喫煙歴では, 5例が非喫煙者であるが, 1日40本以上の喫煙者は2例にすぎなかった。性別では, 男性8例, 女性3例で男性の生存期間が延長する可能性がうかがわれた。

組織別では, 扁平上皮癌5例で, 他の癌に比し予後は良好であるが, 未分化癌2例が含まれている。しかし, 小細胞性未分化癌は1例もない。

腫瘍径では3cmをこえる症例が1例をのぞきすべて含まれている。1例では心膜合併切除例であることから, 肺癌に対する広範囲切除の有用性が示される。

リンパ節転移をみると, 縦隔リンパ節転移の1例をのぞき, すべて肺門リンパ節転移にとどまる症例であるが, リンパ節転移がみとめられなかった症例は1例にすぎなかった。このことは, 長期生存をうるためには, 肺門部リンパ節転移にとどまり, 対側の旁気管リンパ節転移をみとめないことが条件となる。しかも, いずれも組織学的に血管侵襲をみとめた症例は1例もなかった。また, 1例をのぞき, すべて術後に放射線療法ないし制癌剤投与が行われた症例であることは, 術後補助療法の有効性を示している。

これら5年生存例のうち, 臨床症状が再現した症例は2例である。1例は初回手術後5年後に対側肺に癌巣が出現し, 手術により確認された症例であり, 他の1例は7年後に縦隔陰影の拡大とともに両側頸部リンパ節転移をみとめた症例である。

対側肺の異常陰影をみとめた症例は初回手術時と第2回手術時もほぼ同様の腺癌の組織像を示し, 転移巣であるか, 重複癌であるのかの決定が困難である症例である。本症例はなお生存中で経過観察中である。他の1例は未分化癌で初回切除後7年目に頸部リンパ節転移をみとめた症例であるが, 本症例からみてリンパ行性転移が初回手術後5年経過しても, なお, 転移出現の可能性を示唆した症例と考えている。これら5年経過後に臨床症状が再現した2症例の詳細を報告する。